宇根 豊
Yutaka Uer
愛国心と愛郷心
新しい農本主義の可能性
農文協
9784540141539
1920036024001
ISBN978-4-540-14153-9
C0036 ¥2400E
定価（本体2400円＋税）
発行 農文協
宇根 豊
農文協
カバー装画 小林敏也

はじめに 14

序章 私たちは「国民」になった …… 17

「国民」の誕生 …… 18

国民・国家意識はそう簡単には浸透しなかった 18
愛国心（ナショナリズム）と愛郷心（パトリオティズム） 21
近代化とは何だったのか 24
「パトリオティズム（愛郷心）」の本体 28
国民国家による国民国家のための「国民化」 30

パトリオティズムとナショナリズム …… 34

新・教育基本法の矛盾 34
国境とナショナリズム 36
国境の島と目の前の荒れ地と 40
意識的で先鋭な愛郷心は、愛国心に対抗できるのか 43
本書の見取り図 47

第一章 「食料」の誕生……53
「国民」と「食料」……54
農業の新しい価値づけ 54
食料自給率というナショナリズム 60
無意識のナショナリズム 66
パトリオティズムの衰退 69
国民国家と農との関係 72
「消極的な」農の価値……75
消極的な価値に支えられる人生 75
松井浄蓮の世界 78
食卓の消極的な価値 89
経済価値だけでは国境は守れない 92

第二章 「日本農業」と「専門家」の誕生 …… 95

「日本農業」の誕生 …… 96

「日本農業」とわが村の農業 96
「日本農業」でない農業の存在 100
「日本農業」の誕生とそれから見捨てられた農業 105
「日本農業」でないと見えないものもある 107
「日本農業」では見えないもの 109
「日本農業」が捨てた最大のもの 111
危険なパトリオティズム 113

農業の「専門家」の誕生 …… 117

農業の専門家とは誰か 117
「学」が持っている基本的な性質 118
内からのまなざしの学 121
百姓学の方法 123
「学」と「農政」の空白に気づくかどうか 126
「学」のほんとうの空白 128

第三章

資本主義から農本主義へ …… 133

「農の原理」の自覚 …… 134

あたりまえの世界を表現し価値づけることは難しい 134
農の「原理」へのまなざし 136
二段重ねの餅 137
下段の価値を「原理」に仕立てる 140
貧しさで経済に対抗する 143
経済成長を拒否する心性 145
「農の原理」にこだわる 146

「農の原理」を守る農本主義 …… 150

自給が農の原理になるとき 150
農本主義は可能か 153
食料が「原理」にならない理由 155
求道と社会変革 157
新しい農本主義の原理とは 159

第四章

百姓は自然とともに近代を撃つ ……165

松田喜一の農本主義 ……166

農本主義思想の核になっているもの 166
仕事は国家から自立する 169
人間中心主義からの脱却 171
百姓の五段階 174
旧・農本主義の終焉 176

「天地自然」を思想的な武器にする ……180

新しい思想的な武器 180
池の中に鮒は戻れるか 181
なぜ「自然」に惹かれるのか 185
なぜ「自然」という言葉が好きなのか 189
なぜ「自然への没入」はすごいのか 193
百姓仕事と宗教 194

第五章 農本主義者はどう生きたのか……201
橘孝三郎の生き方……202
農本主義者・橘孝三郎 202
土（原理）を守るための思想 204
農は資本主義に合わせられない 208
農本主義とは何か 211
自然への没入（仕事の喜び、人間性の解放） 213
橘孝三郎の革命 217
橘孝三郎のロマン 220
インテリの覚悟と宿命 224
なぜ五・一五事件に参加したか 227
創学への挑戦 232
左翼は農本主義をどう見ていたか 235
権藤成卿の思想……240
国家に対する社稷の優先 240
権藤成卿の歴史観 259

第六章 農本主義の可能性……265
「農本主義」は死んではいない……266
池の中の鮒がいいのか、池をはい出た鮒になるべきか 266
戦前期の農本主義の核心 268
戦後の農本主義はどうなったのか 270
旧・農本主義者の時代と現代の比較 273
農本主義が生まれる契機 275
原理の再発見 277
「新しい農本主義」の出立……281
新しい農本主義の強さ 281
ナショナルな価値がないものを支え続ける百姓 285
カネにならないもの 286
生きもの調査のねらい 289
資本主義が手を伸ばせなかった世界 293

資本主義から農本主義へ 295
農本主義の時代へ 297
生き方が大切 301
赤とんぼへのまなざし・情愛からもうひとつのナショナリズムへ 303

終章 情愛のふるさと ……307

生きものとの交感 308
なぜ私たちは花に惹かれるのか 311
花のほうから見ると 313
道ばたの野の花は、何のために咲いているか 316
引き受ける精神 319
タマシイのふるさと 322

おわりに 324

参考文献 328

はじめに

村の中の椋(むく)の木を見上げて、友人が言います。「昔はこの木に登って椋の実を食べたものだ」。私も応じます。「そうだなあ、オレも登ったなあ」。しかし、私が登ったのは遠いふるさとの椋の木で、遊んだのはこの森ではありません。この村にやって来て、百姓になって二五年が経ちます。この村で死んでいきますが、やっとあの山に帰っていくんだな、死後はこの村を見下ろすんだな、と思えるようになったのは、最近のことです。それまでは私の「ふるさと」は生まれた村でした。思い出の多くは、その村で遊んだ山や樹や風や水や魚や虫や草花でした。

したがって現在の在所には、少年の頃の思い出はまったくありません。この欠落感はなかなか埋められるものではありません。つまりこの村で生まれ育った友人と比べて「郷土愛」「愛郷心」が格段に弱いのです。

その愛郷心が私にも少しずつ育ったことを意識するのは、田んぼに行くときです。この田んぼも借りた田んぼで私の所有ではありませんが、もう完全に私の田んぼです。その田んぼで、夏の日は毎日稲と顔を合わせ、藁

と堆肥をすき込んで土を豊かにし、少しずつ深く耕し小石を取り除いてきました。やっとこの田んぼもわが身の一部だと感じるようになったとき、横を流れている川も、その向こうの山も、村の神社も、私が生きている世界だという気がしてきたのです。名を呼びながら草を刈り、虫見板で虫たちと顔を合わせ、腰を伸ばすと赤とんぼの群れに包まれるとき、ずーっとここで生きてきたような気になるのです。

ただ、この私の世界にも、荒れた風景が、毎年毎年押し寄せてきます。「どうにかならないものか」と胸が痛くなります。つい、この荒廃をもたらしている深い原因は何だろうか、と考え込みます。そして「この原因を取り除かないと、この在所は守れない」と目覚めるときに、湧き上がってくる自覚こそが「意識的」な愛郷心なのです。

明治以降、日本国が「国益」を増し、国民を幸せにするために進めてきた資本主義は「ナショナリズム」を必要としたのだと思います。なぜなら、国が富むからこそ在所も豊かになる、と説得しなければ「愛国心（ナショナリズム）」などは育たなかったからです。一方の「愛郷心」は体よく利用されるばかりで、ほとんどの場面でうち捨てられてきました。

「国破れて、山河あり」と言います。現代はまったく逆です。国は栄えているのに、山河が年々荒れていくのです。政府や農政が悪いとかいう問題

よりも、はるかに根が深い原因があります。

ここに気づくと、もはやこの「ナショナリズム」と、在所への「愛郷心」は相容れません。こういう感情が、年々強くなっていくのが、現代のニッポン国のどこかの在所に住んでいる百姓の共通の実感になってしまいました。国家は、山河を飛ぶ赤とんぼに見とれる時間は無駄な時間だ、と言います。そういう無駄な時間を切れ捨てられない農業は経営感覚に乏しい劣った産業なのだそうです。ほんとうにそうでしょうか。山河や赤とんぼを見つめる習慣を失ったときに、このニッポン国の山河や赤とんぼは、山河や赤とんぼであり続けられるのでしょうか。それを、この本で一緒に考えていきましょう。

現代の私たちはいつの間にか「国民」になっています。
それぞれの在所の集まりが日本国であり、
それぞれの国民の愛郷心（パトリオティズム）が寄り合って、
愛国心（ナショナリズム）になった、と思いこんでいます。
ほんとうにそうでしょうか。
なぜそう思い込むようになったのでしょうか。

序章

私たちは「国民」になった

「農業は国民の命の糧である食料を生産している
重要な産業である」というのは、
今日では誰も疑わない「農の価値」の表現ですが、
ほんとうにそうでしょうか。
なぜ農の価値のうち「食料」だけが突出してきたのでしょうか。
それははたしていいことだったのでしょうか。

第一章

「食料」の誕生

私たちはいつのまにか「日本農業は…」
「日本の農業をめぐる情勢は…」というように
「日本農業」を論じることができるようになっています。
また同時に「今日の農政は…」という議論もできます。
それは私たちが「国民」になっているからですが、
そのために見えなくなった世界があるのではないでしょうか。

第二章

「日本農業」と「専門家」の誕生

資本主義社会の中では、
農のほんとうの価値は認められることはないのではないか、
と感じることがあります。
でも農のほんとうの価値とは何なのでしょうか。
なぜそれは表現したり、価値づけたりされていないのでしょうか。
農本主義は、この疑問に答えようとします。

第三章

資本主義から農本主義へ

なぜ私たちは「農」の世界に惹かれるのでしょうか。
なぜ百姓仕事に人間らしさを感じるのでしょうか。
一昔前までは、農は時代遅れだと批判され、
百姓仕事は三重苦だと言われていたのです。
大きな変化が始まっているような気がします。
かつての農本主義者が農と百姓仕事をどのように見ていたかを知れば、
その理由がわかるかもしれません。

第四章

百姓は自然とともに近代を撃つ

そもそも農本主義はなぜ生まれてきたのでしょうか。
百姓は田畑を耕して生きていけば幸せなはずなのに、
それを許さなかった時代とはどういう時代だったのでしょうか。
現代では、農本主義者が解決しようとした
問題はどうなっているのでしょうか。
二人の農本主義者の生き方と思想をたずねてみましょう。

第五章

農本主義者はどう生きたのか

農本主義は再生できないのでしょうか。
案外共感を呼びつつあるような気もします。
それだけ資本主義が行き詰まってきているのではないでしょうか。
そうであるなら、私が提案する「新しい農本主義」は、
はたして現代社会の中で影響力を発揮できるでしょうか。

第六章

農本主義の可能性

人間の生きものへの情愛の多くは、
百姓仕事と百姓ぐらしから生まれてきたような気がします。
天地有情への情愛がないところでは、
パトリオティズムは育たないのではないでしょうか。
それにしてもなぜ百姓仕事は情愛を生み出すのでしょうか。

終章

情愛のふるさと